

伊澤トシ

## コロナ禍の普通

友と会わなくなった  
飲んで歌って、楽しむことがなくなった  
互いの空気を交え、味わい、触れ合いながら  
全細胞で、その人を感じるものが難しくなった

普通であったそのことが、1つ1つ普通でなくなって  
じわりじわりと落ちていく  
下へ下へと沈みゆく

「ケア」

ふと窓の外を見上げれば、変わらぬ空と白い雲  
変わらぬ普通が、そこにある

「ああ、きつと大丈夫」

変わらぬ普通のその下で、私はなぜだかホツとした